

清水建設で噴出する「宮本社長やめろ」の声

—清水建設は、平成19年6月に宮本社長が社長に就任して以来、業績が著しく低迷。原因は、社長自ら陣頭指揮をとっての、採算を無視した赤字受注の繰り返しによるものである。

●常軌を逸した赤字受注

平成24年度の決算も、開発物件の売却による利益で営業黒字になっているだけで、実質は営業赤字。批判を避けるため、株主への配当を何とか維持しているという状況である。

宮本社長は、東大建築卒ということもありプライドが高く、マスコミ等で目立つことが大好きで、聞こえのよい受注・売上高「業界トップ」の地位に執着しており、ビッグプロジェクトがあると自ら客先に乗り込んでいって、大赤字で受注。このことは、東京では新入社員でも知っている公然の秘密である。数千万円の赤字工事なら、顧客との長期的な関係を考えて赤字でも受注するという選択肢もあるだろうが、1件の工事で50億円、100億円の赤字となると、気が狂っているとしか言いようがない。上場会社で、誰も責任を取らないまま、こんなことがまかり通っているのが本当に不思議である。

貸借対照表の負債に計上している「工事損失引当金」（まだ売上にあがっていない赤字工事の損失見込額の合計）の平成25年3月末の残高は、なんと354億円。これは大林組の6倍以上という異常ぶりである。（鹿島建設や大成建設も引当金の残高が大きいですが、これはアルジェリアの高速道路の巨額の赤字が原因。）平成24年度の当期純利益が56億円程度の会社で、こんなに赤字工事が残っているのは、経営が成り立つはずがない。

—宮本社長就任前は、同じみずほ銀行系列のゼネコンとして、当時財務状況の悪かった大成建設を清水建設が吸収合併するという噂があったが、無能な経営者のおかげで、今や立場が逆転している。

●宮本社長の数々の無能ぶり

大成建設が経営状態の悪い時に新宿の本社ビルを売却したのに対し、宮本社長は、これだけ業績が悪い中、300億円をかけて豪華な新本社を建設。さすがに後ろめたいからか、言い訳のために、最先端省エネ技術のPRのためと称して、顧客を新本社見学会に繰り返し招待しているが、費用がかかっているだけで、全く受注にはつながっていない。

鹿島建設は、この4月に業績悪化を受け日本選手権に優勝しているような有名なアメフト部への支援を打ち切ったのに対し、宮本社長は清水建設のラグビー部が名もないクラブチームになった後も、多額の支援を続けている。

普通の経営者は業績が悪いと広告宣伝費を絞るのだろうが、宮本社長は、主な顧客である上場企業の役員が絶対見ないような「世界の果てまでイッテQ!」という低俗な番組に

多額の広告宣伝費を使い続けており、これを見て入社してきた最近の若手社員は使えないものばかりで、広告宣伝効果はマイナスである。

また、これだけ業績が悪いのに、社長が経営責任を取らないのはもちろんのこと、平成25年4月の役員人事では、退任役員が定年になった5名に対し新任役員は8名と、何と役員数が増加。のみならず、常務昇格が9名、専務昇格が3名、降格はなしの大盤振る舞いで、役員の間でも拡がっている社長批判を人事処遇により丸めこもうとしている。